

# 災害時の外国人のボランティアは 積極的な防災になりうる

東北大学大学院教育学研究科准教授 李 仁 子

## 1 はじめに

みなさん、こんにちは。よろしくお願ひします。今日はよろしくお付き合いください。

今回の私の話は、震災が起こったときに、外国人に対して、どのように防災・減災ができるかという話です。外国人自らのボランティアそのものが積極的な防災になりうるのではないかという問題意識をもって用意をさせていただきました。みなさんの身近な周辺のこと引き寄せながら、今日の話をお聞ひいただきたいと思います。

今日は、東日本大震災の現場で出会った外国人とその周辺について話をしようと思います。そのなかでも、外国人の女性たちが行ったボランティアを事例に、多様な人たちの存在や、そのつながりの大切さについて考えたいと思います。こうした事は現代では言うまでもなく多くの場面で言われていますが、私が見た事例をあげると、みなさんがより想像しやすくなると思います。甚大な被害をもたらした被災状況を疑似体験することのお手伝いになるのではないかと思います。それが、「もしも」の時のみなさんの想像力の糧になればというように思います。

## 2 自己紹介

自己紹介させていただきます。私は韓国生まれで、大学を卒業してから日本に留学しました。日本の大学院で文化人類学を学び、移住者の研究、今日のテーマになっている在日外国人のことを主に研究してきました。現在は東北大学の教育学部で文化人類学を教えながら研究しております。先ほど、阪本先生が「地震になれていない外国人の場合はどこに避難すればいいかということが分からない」と仰いましたが、26年前に起こった阪神淡路大震災の時には、私自身がまさにその通りでした。当時、ちょうど修士論文の提出締切の3日前で、私はその日の早朝に寝始めたばかりのときに、強い地震が起きました。地震に対して何も知らないということが、その時初めて分かり、本当に怖かったことを覚えています。これが1分以内で終わることさえ、分からないような状況でした。何も分かっていない怖さのようなものは相当大きかったです。そのような状況ではやはり身近なところで日本人の行動が見えるということは非常に安心なことです。そこから、十数年経ってから、私が被災地の復興について研究するとは想像できなかったですけれども、そのようになりました。

## 3 誰も経験したことのない大津波に襲われた時の避難所

まず、誰も経験したことのない大津波に襲われた時の避難所というのを想像して頂きたいです。東日本大震災は1000年に1回

あるかどうかの災害だとよく言われています。1000年に1回ですので、生きている我々のなかでは誰も経験していない訳です。そのような状況では、専門家といわれる人でも初めての経験になるわけです。

石巻市の船越という地区は60人くらいが生き残りまして、ほとんどの家が津波で流出しました。地区内には、小学校がありました。写真1に写っているのは震災1ヶ月後の4月に小学校の3階に村人が集まっている様子です。船越は震災によって危険区域になったため、人々は住むことが出来なかったため、この人たちは船越から離れたところから会議のために集まっています。漁業や森林などの村の共有財産の分配や、内陸集団移転か高台移転かを議題に話をしたり、安否確認などが主な議題でした。最初のフィールドワークはこの総会の参与から行いました。



写真1 石巻市雄勝船越地区、小学校の3階に集まる地域住民

そこでリーダーシップを取っていた人が言っていたことが、今でも記憶に残っています。当日から自衛隊が入ってくるまでの1週間足らずの期間の話です。船越地区の中には、流出していない家が3軒ほどありました。広く部屋を使うためには、3軒に分かれて避難生活することも考えられました。しかし、そうせずに、子ども、老人、男女関係なく、みんなが一カ所に集まっていたわけです。そこには、このリーダーのアイデアがありました。こうした時には、老人は老人の知恵を、子供は子供の力を、女性は女性の力、男性は男性の力、年齢も関係なく様々な知恵や力を集中させて、お互い助け合いながら打破していくことが大事だということです。つまり、人たちが色々な知恵をもっているから一緒にいた方がいいということを書いていました。

この時にほとんどの家が流されていたので、米などの食べ物も全く足りませんでした。しかし、日頃から田舎の農村部、漁村部では少しずつ玄米を精米して使う習性が強く、玄米はあるけれど、精米した米がないというような状況でした。60人から100人くらいの食事を用意することは大変困難な状況でした。その時に、玄米を精米に手動でもできる方法を知っている年配の方がいました。玄米を瓶のなかにいれて木の棒で突けば玄米の皮が剥けるということでした。お年寄りや子供たちは救済のための瓦礫撤去や行方不明者の搜索活動ができないため部屋にいるしかなかったのですが、その作業を行い、みんなが食事ができるようにしていたという話でした。すなわち、この事例から私たちが学べることは、突然の災害が起こった時には多様な人たちが大勢いることが力に

なるということですが、同意いただけるのでしょうか。

#### 4 東日本大震災時の外国人のボランティア

この発表では、2人の事例を通して考えたいと思います。東日本大震災で外国人のボランティアをしたKさんとUさんの事例です。二人とも、在日コリアンで国際結婚をした女性です。Kさんは、被災地で買い物代行や見守り隊などのボランティアを、Uさんは自分の経験や知識を伝えるボランティアを行いました。彼女たちの活動や周りの状況を詳細に記録し、文化人類学の民族誌の作成を試みました。民族誌は、聞く側や読む側にとって災害の疑似体験となります。この疑似体験は、実際、自分がいざとなったときに想像力を発揮できる助けになります。災害時の想像力というのは非常に重要で、みなさんも防災訓練や災害に対する備えを考えておられると思いますが、実際、その時に置かれた状況、災害の大きさや種類、それらによって対策や対応が似ているものは一つもないわけです。そうした状況では、記憶している様々なものをその場で組み合わせ、災害をうけたその時の状況に応じて動くしかありません。分かりやすいマニュアルはありません。その人が今まで生きてきた体験とか、疑似体験してきたものの中から想像して次の行動を編み出すしかありません。ですから、私は防災につながることを望んで研究しておりますが、直接的に、こういう時にはこのように逃げればいい、こうあるべきだというものではないということです。

## 5 東日本大震災時の外国人のボランティア-Kさんの事例

1人目の事例のKさんは、2000年に国際結婚で来日しました。みなさんご存じのように、東北地域では、嫁不足が問題となり、1980年代から外国人女性たちが花嫁として来日しました。東京や大阪、京都といった都会とは異なるかたちの外国人の構成メンバーがいます。仕事だけではなく、日本の家庭に入っている外国人の女性たちがいます。Kさんもそのようなケースでした。Kさんの場合、国際結婚を専門にしているブローカーを通じて結婚しましたが、仲人から言われた条件の内容と実際はかなりのギャップがありました。仲人から言われていたほど旦那さんの収入が高くなく、生活は苦しいものでした。その上、彼女の場合、日本語も分からない状況で来日しましたので、より複雑な問題を抱えることになります。ところが、彼女は諦めず、仙台の日本語学校にかよって一生懸命勉強しました。さらに、それにとどまらず、ある程度勉強してからは石巻に暮らしている国際結婚した女性たちのための日本語教室を運営するNPOを立ち上げます。そこには自分と同じ境遇の外国人女性たちのコミュニティを作りたいという思いがあったようです。震災2年前にそのNPOを立ち上げましたが、震災によって、彼女はなにもかも失ったので、これを機に旦那さんと都会に出ていくかを悩んだそうです。ところが、旦那さんは出て行かないということで、「では、この地で何ができるのか」と考えたところ、ボランティアを始めました。はじめは、マッサージなど様々なボランティアの人たちが、KさんのNPO

に支援の連絡をしてきて、Kさんがその教室を彼らに提供することから始めました。それが後の買い物代行や見守り隊に繋がっていくことになりました。

## 6 買い物代行と見守り隊

NPOの教室を提供して、外部のボランティアと接したことがきっかけとなって、買い物代行や見守り隊を始めました。時間の関係で結論から申し上げますと、このような積極的なボランティアによって、日本語はもちろんのこと、日本社会や地域に関する理解が深まっていきました。今まで自分の家族とだけ使っていた日本語、あるいは旦那さんの家族を通してしか理解できなかった日本社会のことを深く理解することにつながりました。その活動から得た経験を糧に、現在は東京に移住し、人材派遣会社を起業しています。

写真2、3は、震災1年目にNPOの活動をしているときの様子ですが、地図のなかに、彼女たちが見守りや買い物代行をするところを書き記して、どこに行けばいいのかを2人ずつグループを組んで、訪ねました。その隣には「ごはん」なのに「こはん」と書いてありますが、これは、日本語教室で日本語を学んでいた外国人女性たちが書いたものです。濁音が苦手ですね。この様子から窺えることは、地域の地図も震災前には全く考えたこともなかった彼女たちが、このボランティア活動を通じて地域のことを空間的にも理解していったことです。



写真2 左、ボランティアに行く世帯が記された地図を説明するKさん

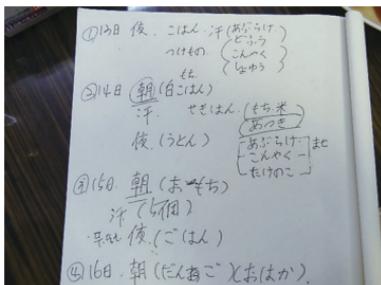


写真3 右、買い物代行のために外国人女性たちが書いたメモ

彼女らが実際訪ねていくのは、このような所（写真4）ですが、ほとんどの建物は残っているものの、その時は住んでいない家が多かったです。例えば、今この3階建ての建物のなかには1人が暮らしているかどうか、という状況で、車がないと本当に買い物ができない場所です。さらに、ここは石巻ですが、被災から6か



写真4 買い物代行を行っていた地域の風景

月以上経っても石巻市内の方に出でいかないと買い物ができるところがない状況でした。そういったところで買い物代行や見守り隊をしていました。

## 7 大津波被災者の娯楽支援

それから時間が経って、大津波で集落ごとなくした人たちが、集団移転ではなく、バラバラな地域から仮設住宅で暮らすようになりました。高齢者の中で、お茶を飲むくらいの友達もなかなかできない状況にありました。こうした中で、被災地のコミュニティ形成のための国からの助成金を利用して、NPOが高齢者の被災者たちが集えるお茶会を作りました。写真5、6はその様子です。彼女がKさんですけれど、集まった高齢者たちとの距離の近さを見て取れます。



写真5 KさんのNPOで開いたお茶飲み会



写真6 Kさんと地元の住民の付き合い

ここまでなるには、時間がかかりました。最初、買い物支援の

ときには、外国人が現れると、どうしてそんなことをするのか、というような感じで疑われていたようです。そのため、はじめのうちにはNPOのスタッフである日本人と外国人がペアになって訪ねました。興味深かったのは、日本人と外国人のペアで家を訪ねて行くと、被災者はどこに視線を合わせるかといえば、日本人に目を合わせたり、話を合わせたりするらしいです。自分の家にこういうものがあると言いながら、持ち出すものも立派なものを見せてくれたり、どこか見栄を張るかのような姿だったそうです。後に、外国人のスタッフだけでも信頼されたり、活動に慣れてきたときには、ほとんどが国際結婚女性たちで家庭訪問を行いました。その時の被災者の態度は日本人と一緒に訪ねた時とは違う様子を見せてくれたそうです。例えばKさんと中国人女性のペアで家庭訪問をすると、ぐっと眼差しが低くなって、普段は見せない部分を見せてくれたと言います。対面を考えて胸の中に秘めておいた話をする。「実を言うと」と切り出して、例えば自分がどのような苦勞をしてきたのか、自分の息子もインドネシア人と結婚しているとか、今まで日本人のスタッフの前では言わなかったようなことをポロっと話すことがあったというのです。

日本人のスタッフが多いわけではないので、外国人同士で行くと今度は時間の経過とともに被災した方々の態度が変わる。胸のうちの話までできたことで、仲良くなって距離感が縮むような経験をしたそうです。Kさんたちが行った外国人女性のボランティア活動は、日本語や地域に関する理解を深めただけでなく、根本的な人間に対する理解も深めることになりました。彼女らも被

災しましたけれども、全てを失ってしまった、そういった人同士が見せあう顔があります。そういったものを彼女らは経験したわけです。これが直接的に減災、防災に役立つわけではないですけど、その後、彼女たちが日本を生きる上で必要な力量を確実に高めることにつながったことには疑う余地はありません。

## 8 東日本大震災時の外国人のボランティア —Uさんの事例

もう1人の事例のUさんは、「梅ちゃんキムチ本舗」というキムチ会社を経営している方です。彼女は1991年に来日して限界集落の“家督”の家に嫁に来るわけです。みなさん“家督”という言葉は、都会の方はちょっとピンと来ないかもしれないと思いますが、農村や山村、漁村の限界集落は、震災が起こるまで、家督が守ってきた状況を理解して頂ければと思います。彼女は、山形の標高の高い山村にお嫁さんとしてやってきました。そこで野菜を栽培してキムチを作って、周囲に裾分けしたことがきっかけで製造・販売まで繋がっていたわけです。そのおかげで地元の外国人のお嫁さんの雇用を創出しています。それは、雇用の創出以外の意味もありました。日本へ来て日本語や日本の文化を知らない、寂しい思いをしている外国人のお嫁さんたちに仕事を提供し、10年間の会社経営の傍ら、彼女たちのコミュニティ形成にも役立ったのです。地元の日本人たちにもキムチの作り方を教えたり、イベントがあるお祭りで商品化されたキムチを売ったりしていま

した。(写真7、8) Uさんは、在日外国人の間だけではなく、地域の中でもよい意味での影響力を持った人の一人でした。そのような彼女の存在を知るようになった岩手県大槌町で災害の研究



写真7 地元の人たちにキムチの作り方を教えるUさん



写真8 地元のお祭りなどの行事に参加してキムチ販売をするUさん

を行っていた人類学者が、彼女の経験を伝える巡回講演を依頼しました。

## 9 大津波被災地域で巡回講演 ―経験の裾分けボランティア

岩手県の大槌町の沿岸部は、津波による被害が大きい被災地域です。養殖や漁ができない男性たちに代わって、海産物を女性たちが加工して収入を得る道を模索していました。調査していた人類学者は、地域の女性たちにUさんの話が役に立つと思い、彼女に経験談をお願いしたのです。言ってみればUさんは、「経験の裾分けボランティア」を行ったわけです。浜ごとに競争する傾向にあったため、隣同士の浜だったのにも関わらず、3箇所を回ることになりました。3箇所とも、こんなに真剣なまなざしで話を



写真9 Uさんの巡回公演（経験の裾分けボランティア）を聞く大槌町の女性たち



写真10 Uさんと大槌町で調査を行う人類学者の竹沢尚一郎先生

聞いています。(写真9、10)

沿岸部の生業は、漁は男性が行い、それを奥さんたちが魚市場に売ることによって収入を得ていましたが、被災した直後は収入が無かったので、どうすればいいかということを知さんに聞くことでいろんなアイデアを自ら出せるようになりました。「私たちもこのようなものを作ってみただけれど」といって意見交換になることもありました。(写真11)

ここで重要なのは、このUさんは、会社を起業してはいるものの、言葉も、日本の風習も知らないところから始めていたことです。家でとれた野菜を使ってキムチを作った経験を、大津波ですべてを失った漁村の女性たちに話をする中で、「自分たちにも何かできるのではないか」という勇気と想像力を引き立てた効果がありました。要するに、普通、外国人と言ったら、脆弱者だと見られがちです。その点がよかったと思います。こういう時に環



写真11 自分たちで作った加工品の試作をUさんに渡す女性

境が整って、誰が見ても専門知識を備えたような起業家が行って、「あなたたちもこうすればきっとうまくいく」と言っても、被災地の女性たちに遠く聞こえた可能性もあります。流暢な日本語を使っているものの、イントネーションなどからすぐ外国人であることがわかる Uさんが、日本に来たばかりのときから、どうやってキムチを作って売ようになったのか、という話をする。そうすると、ものすごくハードルが低く感じられて、自分たちでもなんとかなるかなという気にさせてくれる。Uさんの講演会は、そのような勇気と想像力を与えるようなものでした。

ここで言いたかったのは、突然訪れる災害でみんな困るのは同じだけど、そこで“強い人”や“弱い人”と分かれる訳ではなく、弱いものは弱いものなりの経験をもっているということです。あるいは、強い外国人がいるということではなく、その弱さ、強さというものに関して我々は考える余地があるということです。弱いながらも高齢者や子どもが大きな力を発揮した場合があります。我々が計算できるような強さなど、そうしたもので人の心が動かされるわけではありません。私が主張したかったことは、もう一度立ち返って、大災害のときには多様な人々の知恵や想像力で行動を促す勇気が人間を救うということです。

## 10 多様性の良さを引き寄せる想像力

皆さんと一緒に考えたかったことは、「多様性の良さを引き寄せる想像力」の大切さです。災害時には、全て備わって強く見え

る人が想像以上に何にもできず困る人もいます。反面、誰も思ってもいなかったアイデアが出せる人がいるかもしれません。普段はシステムのなかで物事が流れていますが、そうではない場合には思ってもいなかった人が意外なアイデアをもっている、そうした想像力をもつことで、災害と一緒に乗り越えていくことができます。そして、その可能性を思い浮かべることこそ、セーフティネットになりうるのではないかと考えているわけです。

## 11 災害の民族誌

今日は2人の事例を紹介いたしましたけれど、人類学でいう災害の民族誌を目指しています。このような研究は、防災、減災について、直接的に役立つものではないかもしれません。しかし、被災で何が起こるのか、被災したらどうすべきかなどの想像力を引き立てる指南書のようなものです。その民族誌を通して、我々は想像することができるのではないかと考えて、ご紹介させて頂きました。本日はありがとうございました。

